

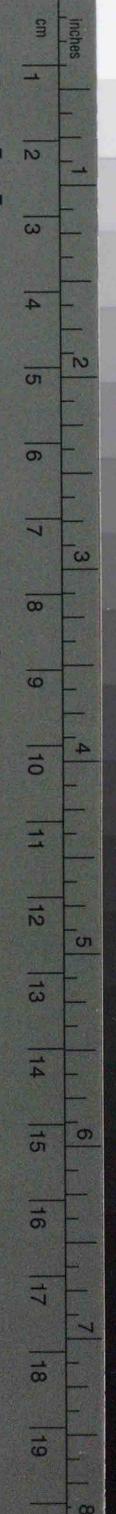
41373

教科書文庫

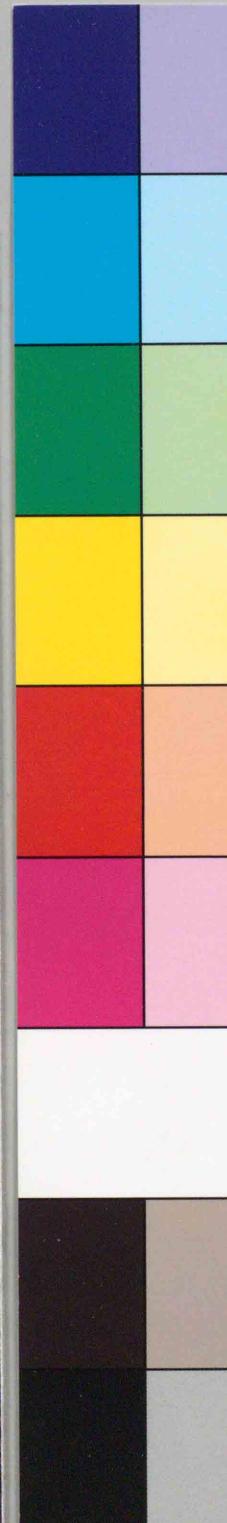
4
810
31-1929
25000 32329

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

**Kodak Color Control Patches**

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

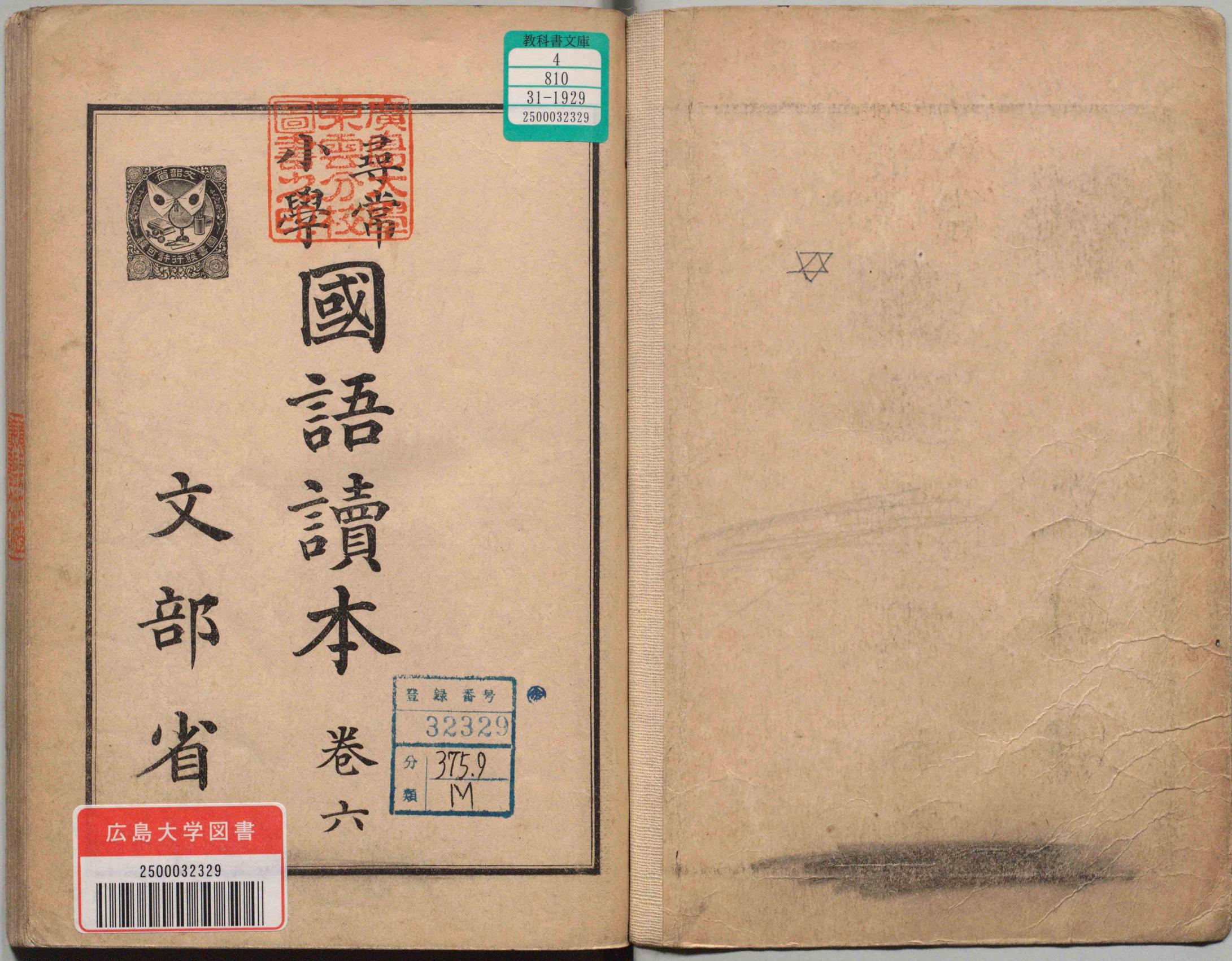
尋常國語讀本 卷六

文部省

T 1A4
1H9
To 46

4
810
31-1929
25000

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



もくろく

第一 傑の山	一	日本	二	日本	三	ヤクワントテツビン	四	日本の高山	五	日本の高山	六	ヤクワントテツビン	七	きのこ取	八	きのこ取	九	海	十	海	十一	一	しけ	二	なぎ	三	くりから谷	四	霜	五	虎と蟻	六	弓流し	七	入營した兄から	八	笑ひ話	九	鮭		
	一	冬の夜	二	萬じゆの姫	三	磁石	四	けんやくと義捐	五	モスリン	六	モスリン	七	永すべり	八	神風	九	象	十	千早城	十一	記念の木	十二	芽	十三	伊勢參宮	十四	入營中の兄へ	十五	父から	十六	百	十七	百三	十八	百四					
	一	四十	二	十五	三	十六	四	十七	五	十八	六	十九	七	二十	八	二十一	九	二十二	十	二十三	十一	二十四	十二	二十五	十三	二十六	十七	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十

第一 傑の山

「今年はほんたうにほう年だ。今の分では去年より七八傑よけいに取れさうだ。さうです。新田が大へんよく出来ました。来年もやはりあの稻を作りませう。」

朝飯の時こんな話が出ました。今日はうちの者がみんなたんぼへ稻こきに行きました。おるす居はおぢいさんと私だけです。

卵

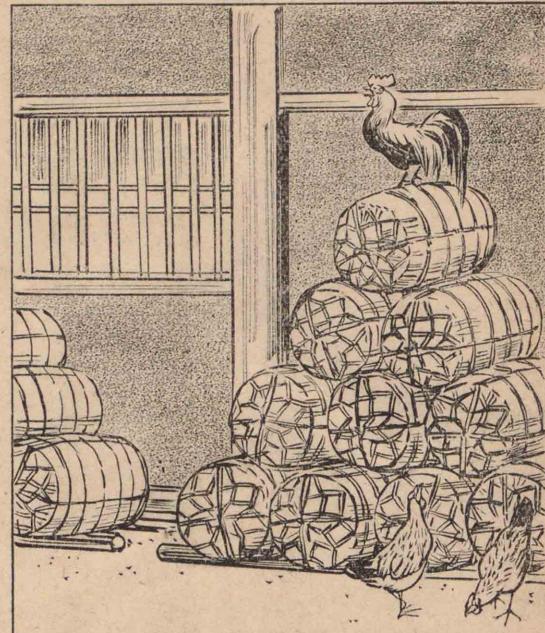
丸 傑

おぢいさんが庭にほしてあるもみをかへしていらつしやると、卵買が来て、卵を七つ買つて行きました。

今どこのうちへ行つて見ても、傑の山が出来てゐます。うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。一番下は四傑、一番上は一傑で、一山は十傑づつです。

昨日までに二山出来て、もう三つ目の山が

國六



出來かゝつてゐます。今日庭にほしてあるもみをすつて、傑に入れてつんだら、三つ目の山は出

湯

來上りませう。
私がたんぼへお湯を持つて行つてくると、おぢいさんが庭で腰をのばして、

「もうお晝かな。」

とおつしやいました。土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、僕の山へ上つてときを作りました。

第二 日本の高山

朝晩めつきり寒くなつた。高い山はもう雪だらう。

「にいさん、富士山はまつ白でせうね。」

山

寒晚

拾

新高内

「さうさ、中ほどまでは降つてゐるかも知れない。何しろ一万二千五百尺もあつて、内地第一の高山だから。」

「それでは日本一の高山は。」

臺灣の新高山さ。これは一万三千尺からある。臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、それでも此の山には、時に雪を見ることがあるといふことだ。」

新高山

六

「一番は新高山、二番は富士山、三番目は。

「いや、二番も三番も臺灣にある。富士山は六番目だ。
富士山の次は。
内地では甲斐の白根で、
一万五百尺。



次

國六

東山

「其の次は。
信州の槍岳や赤石山で、どれも
一万尺以上ある。」

「外國には、新高山より、もつと高い山がありますか。」

「印度のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。しかし三郎、高い山がかな

世界
以外



國六

都

らず名高い山だとはかぎらない。奈良の春
日山や三笠山は千尺そこくだが、白根や
槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山に
してもさうだ。

ふとん着て、ねたるすがたや東山。

で、先づ高い岡だと思へばよい。

「高くて名高いのは、どの山ですか。」

「それは富士山さ。」

岡

金

第三 ヤクワントテツビン

或晩人ガネシヅマツテカラ、金物屋ノ店デ、
ヤクワントテツビンガ、ジマン話ヲシ合ヒ
マシタ。先ヅヤクワング言ヒマスニハ、
「金ニハイロくアリマスガ、中デ一番人
ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デア
ラウト思ヒマス。」

金ヤ銀ハ美シクテ、オアシニナツタリ、指

安

ワニナツタリ、其ノ外イロくナカザリ
物ニナリマスガドチラモタクサンアリ
マセンカラ、ネダンモ高ウゴザイマス。銅
ハソレニヒキカヘテ、金ヤ銀ヨリモタク
サンアリマスカラ、シタガツテネダンモ
安ウゴザイマス。ソレデ、オアシニナルコ
トモ出來レバ、針金ニナルコトモ出來マ
ス。金ダラヒニモナレバ、私ノヤウナヤク

ワンニモナリマス。シテミレバ銅ホド役
ニ立ツ物ハアリマスマイ。

テツビンハ

^ナルホド、銅ハタクサンアツテ、役ニモ立
チマセウガ、モツトタクサンアツテ、モツ
ト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。
飯ヲタクカマモ、物ヲニルナベモ、湯ヲワ
カス私モ、私ノ乗ルゴトクモ鐵デス。其ノ

鐵(鉄)

釘 艦

外、釘や針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワ
ン車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガ
ナケレバ造ルコトガ出來マセン。今デハ
鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセンガ、
人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。

之

ヤクワンハ之ヲ聞イテ、
ソレデモ鐵ハヂキニサビテ、赤クナルデ
ハアリマセンカ。

使

ト言ヒマシタ。其ノ時鐵ビンハ

「私夕チノサビルノハ人ガ使ハナイカラ
デス。モシセイ出シテ使ツテクレサヘス
レバ、イツデモ光ツテキマス。銅ハ人ニ使
ハレテヰテモ、時々青イ物ヲ出シマス。ア
レガヤハリサビデス。シカモ其ノサビハ
大ソウ毒ナ物デス。」
ト言ツテ、中々マケマセンデシタ。

毒

第四 きのこ取

折

意 初

二三日降りつゞいた雨がからりとはれた
ので、昨日のお晝すきにいさんときのこ取
に行きました。松山の入口で、赤くなつてゐ
たぐみを一枝折ると、

「そんな大きな枝を。」

と、にいさんに注意されました。

僕がぐみをたべてゐる間に、にいさんは初

茸を五六本取つたやうでした。僕が紅色の
きれいなきのこを取つて、にいさんに見せ
ましたら、

「あゝ、それは紅茸だ。毒だよ。其の手でぐみ
をたべてはいけない。」

と、にいさんが言ひました。僕はびつくりし
て、ぐみも紅茸も地面へなげつけました。
それからにいさんと、ざふ木林へはいつて、

落

じめくした落葉をふんで、ねずみ茸を少し取りました。

だんく上つて行くと、

山の中でも、三軒家でも、

住めば都よ、わが里よ。

木びきの力藏さんがうたをうたひながら、
大きなのこぎりで板をひいてゐました。何
の木か、おがくづが大そうよくにほつてゐ

木住家

ました。にいさんが

「今日は」

と言つて、

「此の近くに、じめぢの出る所
はありませんか。」

とたづねますと、

「さあ、まだ早いかも知れない

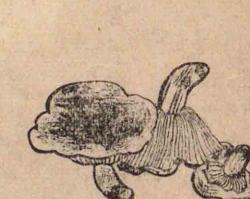
がね。」



しめぢ



ねずみ茸



初草

教

と言つて、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。

列

禮(礼)

行つて見ますと、なるほど少し早すぎました。が、それでも、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。ふまないやうに注意して、かご一ぱい取つて歸りました。歸りがけに、力藏さんにお禮を言ひましたら、

「雨降つたら、又お出で。」

と言ひました。

第五 海

一 しけ

鉛色の空は次第々々に低くなつて來ます。風がひゆうつとうなつて來るたびに、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうになります。うちよせて來る波は、岩をかみ、小じやりをとばしては、さあつと引いて行きま

す。もとより舟は一そとも出てゐません。いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの音は少しも聞えません。冬時の海には、よくこんなことがあります。こんな時には、

「これが五日もつゞくと、ひぼしだ。」
と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

ニ なぎ

空もみどり、

海もみどり、

空につゞく海のみどり、
海につゞく空のみどり、

すみきつて、

かゞみとかゞみ。

沖ものどか、
濱ものどか、

沖へ急ぐ兄の小舟、
濱へ歸る父の小舟、

すれ合つて、

ゑがほとゑがほ。

第六 くりから谷

木曾義仲きそが都へせめ上ると聞いて、平家は
あわてて討手をさしむけました。大將は平
維盛これもりで、十万騎ゑつちよを引きつれて、越中の國の礪

波山なみにぢんを取りました。義仲は五万騎を
引きつれて、これもおなじく礪波山のふも
とにぢんを取りました。

兩方からおしよせて、ぢんの間がわづか三
町ばかりになりました。

其の夜のことです、義仲はひそかに三方の
者を敵の後へまはらせて、兩方から一度に
どつとときのこゑをあげさせました。

不

不意を討たれた
平家方は、上を下への
大きわぎ、弓を取つた
者は矢を取らず、矢を取つ
た者は弓を取らず、人の馬
には自分が乗り、自分の馬
には人が乗り、後向に乗る
者もあれば、一匹の馬に二



暗

人乗る者もあります。暗さは暗し、道はなし、
平家方はにげ場がなくて、後のくりから谷
へ、なだれをうつて落ちました。

親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば
兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、かさ
なりかさなつて、ずゐぶん深いくりから谷
が、平家の人に馬で埋まりました。

大將維盛は命からぐ 加賀の國へにげま

した。

第七 霜

今朝

霜 菊

今朝は大そう寒い。

屋根の上に霜がまつ白だ。

庭の菊も白い花びらに赤みがさして來た、
霜にあたつたからだらう。
うめもどきの實がいつもより目立つて見
える。

元

國六

ひよどりは元氣な鳥だ。こんな寒い日にも、
朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴
いてゐる。

第八 虎と蟻

大きな虎とらが山おくで、

「どうも分らないのは、あの弱い人間がわ
れわれの仲間なかまを生けどりにするこことだ。
とひとりごとを言ひました。其の時

弱

笑

「あはゝ。と笑ふものがありました。虎が見まはしましたが、だれも居ません。

「だれだい、今笑つたのは。
「私は、蟻ありです。」

程なるほど、ごまつぶ程の蟻が一匹虎を見上げてゐます。

「何で笑つた。」

「だつて分り切つた事でせう。人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありますせんか。私どもだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。」



虎はおこつて、蟻をふみつぶさうとしました。蟻は虎の指のまたからくゞつて、仲間の者にあひづをしました。

さあ大へん、何千匹か何萬匹か、數かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。さうして虎の目・鼻・耳・口、所きらはず食ひつきました、頭のてつぺんから尾のさきまで、からだ中すき間もなく。

食鼻

虎はうんくうなつて、かけまはるより外、どうすることも出來ません。とうく弱つて、蟻にあやまつたと言ひます。

第九 町ノ朝

一番汽車ニ乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。町ハマダヒツソリトシテ、ネムツテヰタ。其所此所ニニハトリノコエガ聞エタ。

マツ先ニ出アツタノハ牛乳配達^{ギウニユウハイタツ}デ、車ノ音
ヲ高クサセテ、ハシツテ行ツタ。橋ノタモト
ニ人力車ガ一ダイアツテ、車夫ガ
「ダンナ、マキリマセウ。」

ト言ツタ。

東ガ白ンデ、屋根ノ霜ガ見エルヤウニナツ
タ。カラノ荷車ヲヒイテ行クノハ、八百屋ヤ
サカナ屋デ、買出シニ行クノラシイ。病院^{キン}
ノ

前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明ケハジメタ。少シ行
クト、呉服屋^{ゴフク}ノ小ゾウガ表ヲハイテヰタ。
自轉車^{テン}ガ後カラ來テ、カケヌケテ行ツタ。豆腐屋^フ
ノラツパヤ煮^{ニマズ}豆屋ノリンガ小路^{コウヂ}ノオ
クニ聞エテ來テ、町ハダンくニギヤカニ
ナツテ來タ。

停車場近クニナルト、急ニ人通ガ多クナツ
タ。ベンタウラサゲテ來ル女工ハ、サツキカ

ラ汽テキノ鳴ツテキル工場へ急グノデア
ラウ。

朝日ガパツト西ガハノ家ノガラス戸ニカ
ガヤイタ。

停車場デキツプラ買ツテキルト、郵便物ヲ
ツンダ車ガヰセイヨクカケテ來タ。

第十 弓流し

屋島の合戦に、義經よしつねが小わきにはさんでゐ

た弓を海へ落しました。

弓は潮しほに引かれて流れ去ります。義經は馬の上にうつぶしになつて、むちのさきでそれをかきよせようとします。敵は船の中から熊手くまとを出して、義經のかぶとに引っかけようとします。源氏の者どもは義經をかばひながら、

「捨てておしまひなさい。」

太刀

「お捨てなさい。」

と口々に言ひます。それでも義經は、太刀で熊手をふせぎく、とうとう弓を拾ひ上げました。

陸

陸へ上つた時、家來が

「たとい金銀で作つ

國本



三十六

惜代

た弓でも、御命には代へられませぬ。」

と申しますと、義經は

笑つて、

「いやく、弓が惜し

かつたのではない。

叔父ためとも爲朝の弓のやうな強い弓なら、わ



第十 弓流し

三十七

戰^{何時}

ざと敵にやつてもよいが、此の弱い弓を取られて、『これが義經の弓だ。などと言はれては、源氏の名折れになるからだ。』と言つたと申します。義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

第十一 入營した兄から

國では大雪が降つたさうだね。こ

服

つちは國よりよほどあたゝかだ。洋服は着なれなかつたので、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。
入營後はじめて此の前の日曜日に外出をゆるされた。昨日はとなり村から來てゐる歩兵の音吉君と二人で町を見物した。お前はな

兵 昨日 昨日 出入 營

ぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、兵には歩・騎・砲・工・航空・輪重の六種があつて、私の村から、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。

大工の松藏さんは工兵、力松君は砲兵、正作君は航空兵、役場につとめてゐられた下村さんは騎兵、私

を入れて村からは五人も出てゐるが、兵種がちがふと、兵舎のあり場所もちがふので、めつたに一しょになることはない。どの町村からも、歩兵が一番多く出てゐるのに、私の村からは私一人だ。其の代り輪重兵の外は各種の兵が出てゐる。輪重兵にも其の中にだれか

隊

出るだらう。分家の萬藏君などは小男だから、いよつとすると輜重輸卒ゆそつにあたるかも知れない。お前は今分では大男になりさうだから、砲兵か騎兵になれるだらう。からだをぢやうぶにして、よく學問をべんきやうしなさい。軍隊へ來ても、學校でなまけてゐた者は

倍

人一倍苦勞くろうをする。其の中に又くはしい事を知らせよう。

一月二十五日 兄から

千太どの

第十二 笑ひ話

一

「海の上でも歩けさうだ。
どうして。」

歩

「左足が沈まない中に右足を出し、右足が沈

まない中に左足を出す。」

「なるほど、理くつはさうだ。」

二

月と日と雷が同じ宿屋にとまりました。朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。宿の者にきくと、「もうとうにお立ちになりました」と言ひます。雷はかんしんして、

「あゝ、月日の立つのは早いものだ。自分は夕立にしよう。」

第十三 鮭

叔父サンニ鮭ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナ
イ中ニ書イテ置カウ。
鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。其
ノワケハ、川デ卵カラカヘツテ、海デ大キク
ナルカラダ。

淺 産

大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川へ上ツテ來ル。ダンく 上流ニサカノボツテ、時ニハセ中ガ出ル程ノ淺イ所マデ上ツテ來ル。コレハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケニ來ルノデアル。

穴 穴

キレイナ水ガサラ／＼流レテ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中ヘ卵ヲ産ム。卵ハアヅキ小豆程ノ大キサデ、

粒

ウスアカイ玉ノヤウニ見エル。一匹デ三四千粒モ産ムトイフコトデアル。産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセテ、外ノ魚ガソレヲ食ハナイヤウニシテ置ク。ソレカラ海ヘ歸ルノモアルガ、多クハツカレテ川デ死ンデシマフラシイ。

翌年ノ春ニナツテ、卵カラカヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。四五年モタツト、大キク

我 产

ナツテ、今度ハ自分が卯ヲ産ミニ川へ上ツ
テ來ルガ、フシギニ自分が生レタ川へ歸ツ
テ來ルサウデ、之ヲ鮭ノ里歸トデモ言ツタ
ラヨカラウ。ト叔父サンガ言ハレタ。
鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我ガ國^{カヲ}デハ樺太^{フト}ト北海
道ガ才モナ產地ダサウダ。

第十四 冬の夜

ともし火近く

衣ぬふ母は

春の遊の

樂しさかたる。

居ならぶ子どもは

指を折りつつ、

日數かぞへて、

喜び勇む。

ゐろり火はとろく、

勇

樂



繩語忘

外は吹雪。

ゐろりのはたに繩なふ父は
すぎしいくさの手がらを語る。

居ならぶ子どもはねむさ忘れて、
耳をかたむけ、こぶしをにぎる。

ゐろり火はとろく、外は吹雪。

第十五 萬じゅの姫

源頼朝が鶴岡の八幡宮へ舞を奉納する事

になつて、舞姫ひめをあつめました。十二人いるうち、一人まではありましたがあとの一人がありません。こまつてゐる所へ、御殿に仕へてゐる萬じゅがよからうと申し出た者がありました。頼朝は一目見た上でと、萬じゅを呼出しましたが、かほも美しく、すがたも上品に見えましたので、さつそく舞姫にきめました。萬じゅは當年やうやく十三、

舞姫の中では一番年わかでございました。奉納の當日は、頼朝をはじめ、舞見物の人々が何千人ともなくあつまりました。一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。此の時には頼朝もおもしろくなつて、いつしよに舞を舞ひました。其の五番目の舞姫といふのは、か

の萬じゆの姫であつた
のでござります。

翌日頼朝は萬じゆを呼
出して、

さてく、此のたびの
舞は日本一の出来。國
はどこ、又親の名は何
と申す。はうびはのぞ



又にまかせて取らせるであらう」と言ひました。萬じゆはおそるく、

「べつにのぞみはございませんが、唐糸のからいと身代りに立ちたうございます。」

と申しました。之を聞くと、頼朝のかほの色はさつとかはりました。かはるも道理、これには深いわけがあつたのでござります。頼朝が木曾義仲をせめようとした頃、木曾

の家來手塚太郎光盛てづかの みつ もりの娘が頼朝に仕へて居りましたが、之をさとつて、すぐに義仲の所へ知らせました。義仲からは折りかへし返事があつて、すきをねらつて、頼朝の命を取れ」と、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。

光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひましたが、少しもすきがありません。かへつて、は

だみはなさず持つてゐた刀を見つけられてしまひました。頼朝は其の刀に見おぼえがあつたのでござります。さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふ事になつて、石のらうを造つて、それに入れました。唐糸といふのは此の女のことでござります。

唐糸には其の時十二になる娘がありました。これが萬じゆの姫で、木曽に住んで居りました。

ましたが、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて、鎌倉かまくらをさして上りました。二人は野をすぎ、山をこえ、なれない道を一月あまりも歩きつづけて、やうく鎌倉に着きました。

先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、母の命を助けたまへといのり、それから頼朝の御殿へ行つて、うばと二人で御ほうこうをねがつ

たのでござります。かげひなたなくはたらく上に、人の仕事まで引きうけるやうにしましたので、萬じゅくと人々にかはいがられました。

さて萬じゅは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありません。あゝ、母はもう此の世よの人ではな

いのかと、力をおとして居りました。或日のこと、萬じゅが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、下仕の女が来て、あの門の中へはいつてはなりませぬ。と申しました。わけをたづねますと、

「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」

と答へました。之を聞いた萬じゅの喜はどんなであつたでございませう。

三月二十日、今日はお花見といふので、御殿は人少でございます。萬じゅは其の夜ひそかにうばをつれて、石のらうをたづねました。八幡様の御引合はせか、門の戸は細めに明いて居りました。うばを門のわきに立てて置いて、姫は中にはいりました。月の光

にすかして、あちらこちらさがしますと、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。萬じゅがかけよつて、らうのとびらに手をかけますと、たれかと、らうの中から



申しました。萬じゅはとびらのすきから手を入れて、

「おなつかしや、母様。木曾の萬じゅでござります。」

「何、萬じゅ。木曾の萬じゅか。」

と、親子は手を取合つて泣きました。やがてうばをも呼入れて、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。

これから後萬じゅは、うばと心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでございます。親を思ふ孝子の心には、賴朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゅに渡しました。二人がたがひに取りついて、うれし泣きに泣いた時には、賴朝をはじめ、居合

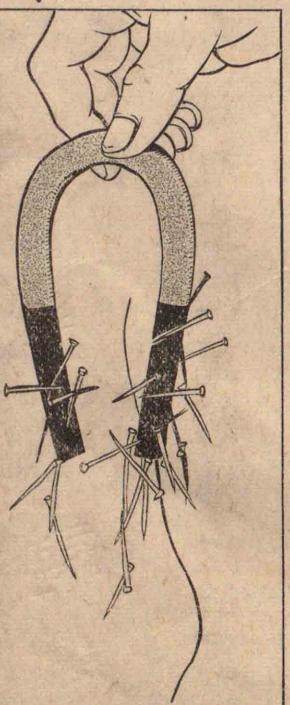
はせた者に、だれ一人もらひ泣きをしない
者はありませんでした。

賴朝は唐糸をゆるした上に、萬じゆにはたくさんなはうびをあたへましたので、親子は、うばもろともに、喜び勇んで木曾へ歸りました。

第十六 磁石

町ノ叔父サンカラ、才年玉ニ大キナ磁石ヲ

イタゞイタ。鐵ヲ引ク力ガ強イ。昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手工ヲシテヰ夕時、弟ガ釘箱ヲ火鉢ノ中ヘヒツクリカヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒハジメタ。僕ハ「待テ、待テ。トイツテ、磁石ヲ持ツテ來タ。サウシテ灰ノ中ヲカキマハシテ、上ゲテ見ルト、



果 残

果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテ
ヰタ。二三返クリカヘシタラ、釘ハ残ラズ取
レテ、其ノ上、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツ
イテ來タ。

第十七 けんやくと義捐

或村に大火事があつて、一村ほとんど丸や
けになつた。其のとなり村の青年たちが見
かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。或物

青 義捐

持の所へ行くと、下男がまだ使へる小繩を
捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐ
た。青年たちは之を聞いて、さゝやき合つた。
「ごまかな人だ。これではとても義捐はし
てくれまい。」

「さうかも知れない。」

さて主人に火事の話をして、義捐金のこと
をいひ出すと、

全|分|途|豆|糲

「それはお氣の毒だ。」

と言つて、たくさん金を出した上に、糲や豆の種を分けて上げてもよいと言つた。

其の歸り途で、青年たちは

「こまかに人だが、出す時には出すね。」

「全くだ。あんな小言を言ふ程だから、此の義捐が出來たのだらう。」

「さうだ、く。」

といひ合つた。

第十八 賀茂川

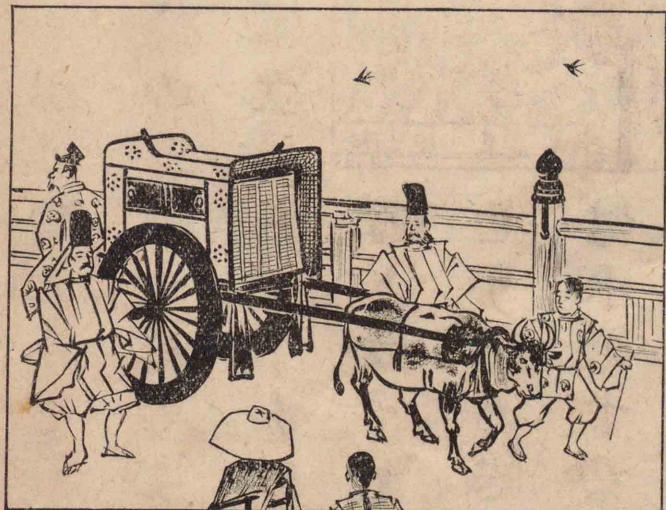
京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川といひます。京都は長い間の都ですから、冠をかぶつて太刀をはいたおくげ様方や、きれいな着物を着て、牛車に乗つたお姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことのございませう。又いくさのあつ

姿 姫

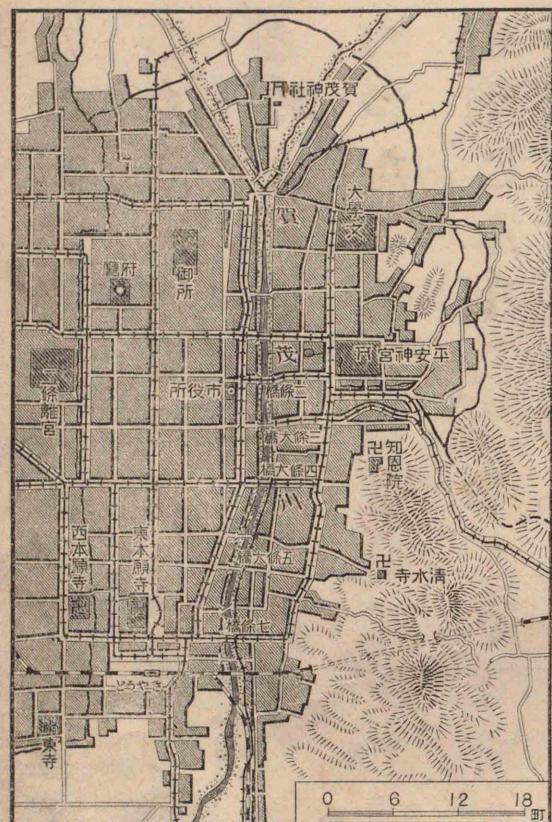
武士

清

た時には、よろひかぶとの勇ましいなりをした武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたことでございませう。こんな人、こんな姿は、とうの昔に見えましたが、川は昔のまゝに清く美しく流れています。



賀茂川には橋がたくさんかけてあります。名高いのは三條・四條・五條の三つの橋でございます。今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。川の西は水のすぐそばから、すき間もなく



致

家が立ちならんでゐます。東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出ます。此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、青い松の間に、五重ごじゆうの塔とうや大きな寺の屋根が見えます。四條の大橋はすぐ其所に見えます。人通の多いのは此の大橋で、これには電車も通つてゐます。よし
つね
べん
けい義經辨慶の五條の大橋は此

の川下にかゝつてゐるのでございます。又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がかすんで見えます。

賀茂川は水が多くないので、船は通りませんが、其の代りに水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。あの美しい友禪染は、もど此の川べりで出來たのでございます。

第十九 モスリン

「春子、才前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオル
カ知ツテキマスカ。」

絹絲ト木綿絲デス。

「マダアリマス。」

「アサ
麻絲。」

「マダアリマセウ。」

「毛絲デス。」



「サウ、ヨク知ツテキマシタ。毛絲デオツタ物
ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。」

「ラシヤトフランネル。」

「ソレダケデスカ。」

「セルモサウデセウカ。」

「サウデス。マダアリマセウ。」

「モウ知リマセン。」

「エサンガ今ヌツテキル此ノ帶ハ。」

「ソレハモスリンデ、絹デセウ。」

「イ、エ、ヤハリ毛絲デオツタ物デス。ラシヤ
ヤフランネルトチガツテ、絲ガ細イカラ、氣
ガツカナイノデス。」

「其ノキレイナモヤウハドウシテツケルノ
デセウカ。」

「コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカ
タヲ置イテ染メルノデ、縮緬チリメンイウゼンノ友禪ト同ジ

デス。コレゴラン、表ダケデ、ウラノ方ハ染メ
テナイデセウ。」

第二十 氷すべり

二三日ひどく寒かつたので、湖の氷が大へ
んあつくなつた。一尺ぐらゐもあらう。
今日は日曜日で、おまけに日本晴だ。湖の上
は朝からひじやうな人出である。

男の生徒もゐれば、女の生徒もゐる。先生も

西 靴



あれば、軍人もある。又西洋人もゐる。みんな氷靴を着けて、思ひくのすべり方をしてゐる。

すべるく、みんなすべる。
片足でおそろしい程早く
すべる者もあれば、人の手にすがつて、こは

曲

國六

ごはすべる者もある。いろくな曲すべりをやる者もあり、ころんではばかりゐる者もある。はた拾まり送おにごつこ、何でもなれてしまへば、少しも陸上とかはらない。

第二十一 神風

博多^{はかた}の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。十何萬といふ大軍である。

九州

守垣

攻

次

四國・九州の武士は博多の濱にあつまつた。元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづいて守つた。

我が武士は敵の攻めよせるのを待ちきれず、こつちからおしよせた。敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつた。けれども我が武士は船の大小などは少しも氣にしなかつた。草野の次郎の

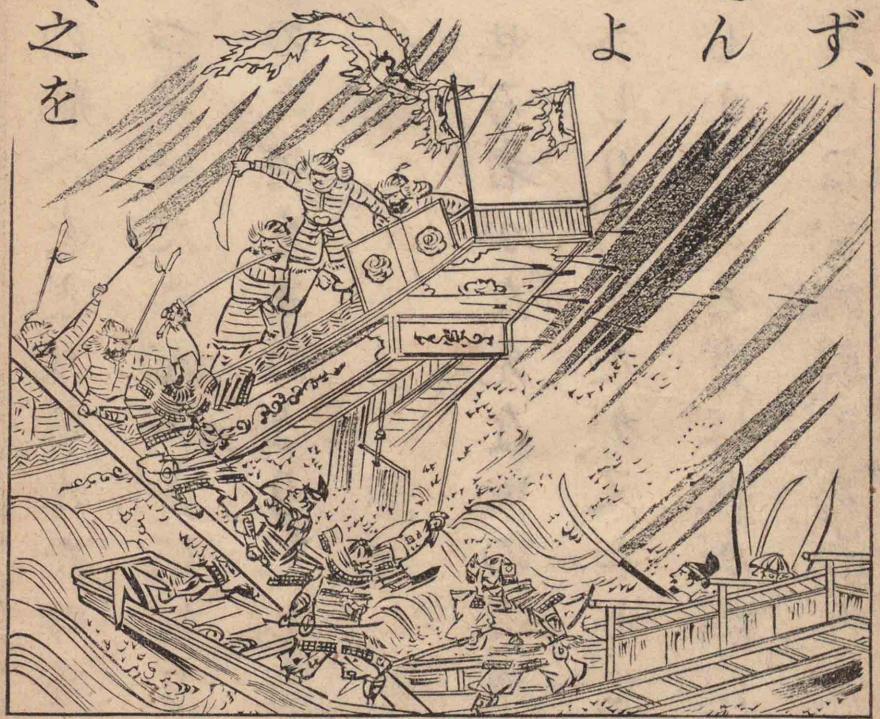
如

如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。敵は此のいきほひにおそれて、鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。まるで大きな島が出来たやうなものである。

此の時河野の通有みちありは、たつた小舟二そそうで向つた。敵ははげしく射立てた。味方はばたばたとたふれた。通有も左のかたを射られ

味射

たが、少しも屈せず、
刀をふるつて進んだ。いよくおしよ
せたが、敵の船は高くて上る
ことが出来ない。通有はほば
しらをたふして、之を



はしごにして、敵の船へをどりこんだ。味方は後からくとつゞいた。さんぐに切りまくつて、其の船の大將を生けどりにして引上げた。

其の後も攻めよせる者がたえないので、敵は一先づ沖の方へしりぞいたが、又おしよせて來るのは明らかである。實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

皇

必

おそれ多くも龜山上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。武士といふ武士は必死のかくごでふせいだ。百しやうも一生けんめいで、ひやうらうをはこんだ。全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。

暴風雨

此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海

はわきかへつた。敵の船はこつぱみぢんにくだけて、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。生きてかへつた者は數へる程しかなかつたといふ。

それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。

第二十二 象

見せ物小屋で象を見た。先づ大きなのにお

數

餘

象

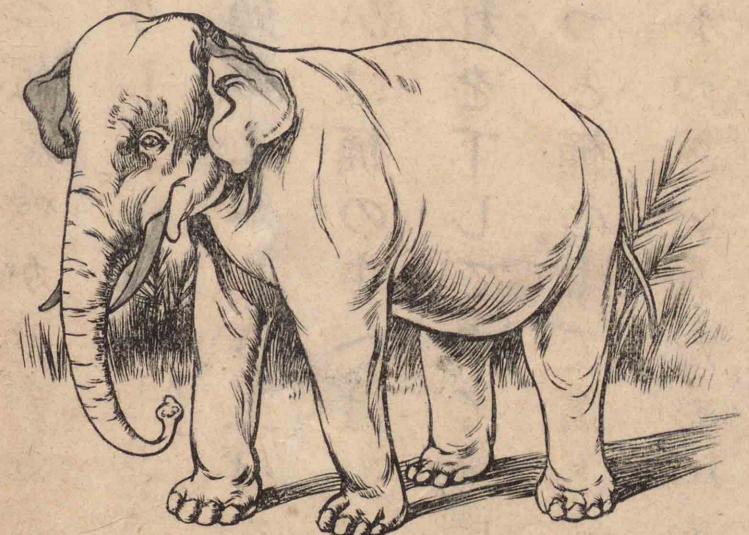
どろいた。たけは一丈からあつた。自由にうごかすことの出来る

長い鼻^み、箕のやうな耳、

長い牙、小さな目、それから太い足、細い尾、一

切繪で見た通りであつた。

象つかひが乗つてゐ



て、口上をのべては、らつぱを吹かせたり、ごばんの上へ乗らせたりした。

象が大きな桶を鼻で頭の上へまき上げると、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。象がそれを下して来て地に置くと、象つかひがぬつと桶の中で立上つた。みんな手をうつてかつさいした。象の鼻は手の用をなすもので、實に力がある。

腕

牙は象つかひの腕よりも太かつた。自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。子どもの手がやつと合つてゐた。象つかひが

「此の太い足で、どさりくと歩きます。」といふと、長い鼻をぶら／＼させて歩き出した。何だか地ひゞきでもするやうな気がした。又

「御らんの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございます。なればお子どもしゆうのお守も致します。印度の國はいたつてあつうございますので、お子どもしゆうは此の腹の下でお書ねをなさると申します。」

といふと、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。すると象は鼻で、其所にあつたうち

顔

はを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。此の時、

「大きなお守さんだ。

と誰かがいつたので、みんなが一度にふき出した。

第二十三 千早城

楠木正成くすのきまさしげが守つた千早城は、けはしい金剛こんごう山上ざんじょうにはあるが、まはりが一里いちりにも足らず、

城千足

誰

賊城

總勢そうせいわづか千人ばかり。之をかこんだ賊は百萬騎ばくばんきといふ大軍で、城の四方二三里の間は、人や馬でふさがつた。

こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

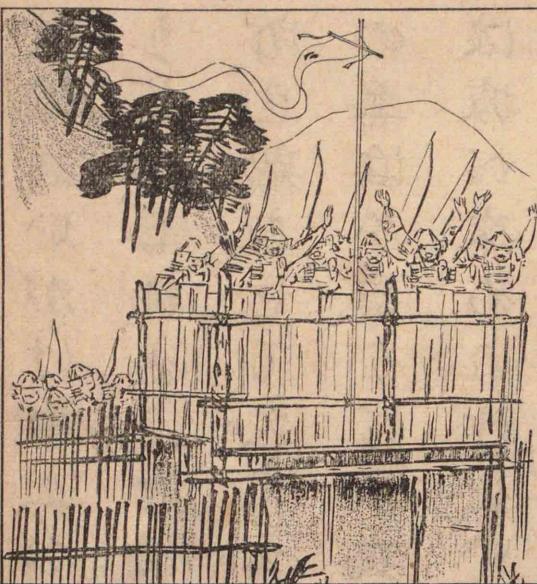
來汲

これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかつた。先づ谷川のほとりに三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに来られないやうにした。城中には十分水の用意がしてあつた。二日たつても三日たつて



旗

も汲みに来ない。番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。



惡

正成は此の旗を城門に立てて、さんぐに賊を惡口させた。賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、正

餘聲

成は高いがけの上から大木を落させた。さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘もころした。此の上はひやうらう攻にしようと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。

或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつときの聲をあげた。賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな」とおしよせた。城兵はさつと引上げ

石

たが、二三十人はふみとゞまつた。賊が四方から之を目がけておしよせると、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころされた。ふみとゞまつてゐたのは、みんな藁人形わらにんぎやうであつた。賊はうまくはかられたのである。

もう此の上は、しやにむに攻落さうといふので、賊は大きなはしごを作つて、之を城の

堀 我

堀にわたして橋にした。幅が一丈五尺、長さが二十丈、其の上を賊が我先に渡つた。今度こそは千早城もあやふく見えた。すると正成は何時の間に用意して置いたか、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。さうして其の上へ油をふりかけさせた。橋はまん中からもえ切れで、谷そこへどうと落ちた。又賊は何千人か

油

傷

官

退 減

死傷した。

賊が千早城一つを持餘してゐると、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。百騎にげ、二百騎にげして、はじめ百萬騎といつた賊も、しまひには十萬騎に減じ、前後から官軍にうたれて、残少になつて退いた。正成は實にえらい人である。

第二十四 記念の木
村の學校のげんくわんの
向つて右の落葉松は、
わたしの子どもが植ゑたので、
其の子はとうに戦死した。

あの學校がたつた時、
うちの畠にあつたのを
死んだあの子が掘取つて、

かついで行つて植ゑたのだ。
あの子は十二、落葉松は
あの子のせいより低かつた。
それが今では學校の
二階のまどにとゞいてる。
あの子がいくさに行く時に、
學校の前でふりかへり、
わたしの植ゑた落葉松が

あんなに高くなりました。

昨日學校で校長に、

あの木の事を話したら、
はじめて聞いた記念の木、
大事にするとおつしやつた。

第二十五

(芽)

「一雨々々暖になつて、よいあんばいです。
と、おかあさんが誰かにおつしやつてゐる

時、私は庭へ出ました。雨あがりの庭はぼう
つとけむつてゐました。

池のはたへ行つて見ると、しやうぶが小指
程に芽を出してゐました。うちの人はみんな
知らずに居るから、一つ取つて行つて見
せようと思つて、手を出すと、

「義一さん、それはお節供せつくに使ふのですよ。
といふねえさんの聲がしました。ねえさん

は赤いたすきをかけて、手洗鉢の水をかへてゐました。

なるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。しやうぶ湯を立ててうち中の者がはいつた。かしはもちをこしらへていた。こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、しやくやくが赤い芽を出してゐました。

軒

第二十六 伊勢參宮

一 入營中の兄へ

其の後おさはりもございませんか。おとうさんは昨日分家の叔父さんと、夜汽車で伊勢^{いせ}參宮に立たれました。參拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。うちにも村にも、かは

つた事はありません。

三月十八日

千太

兄上様

二 父から

昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。宇治橋を渡つて神苑に入り、千年もたつたかと思ふ老木の下へ行つ

午
外宮
參

老

た時には、何となく心持がかはつ

て、一そうあり
がたくかんじ

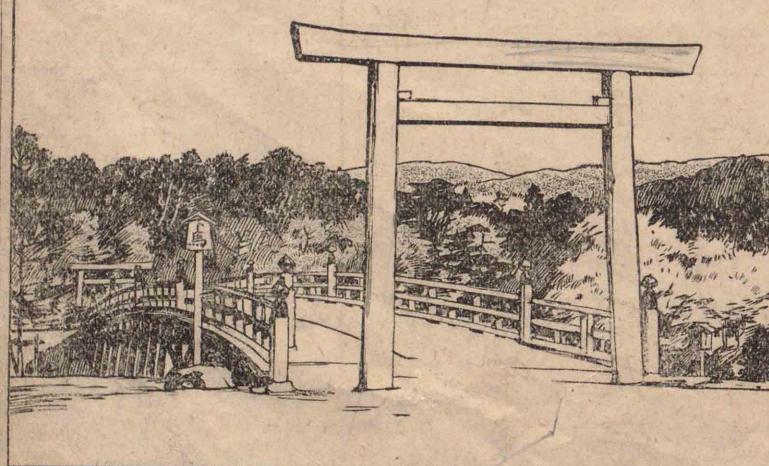
た。

御門の前でう

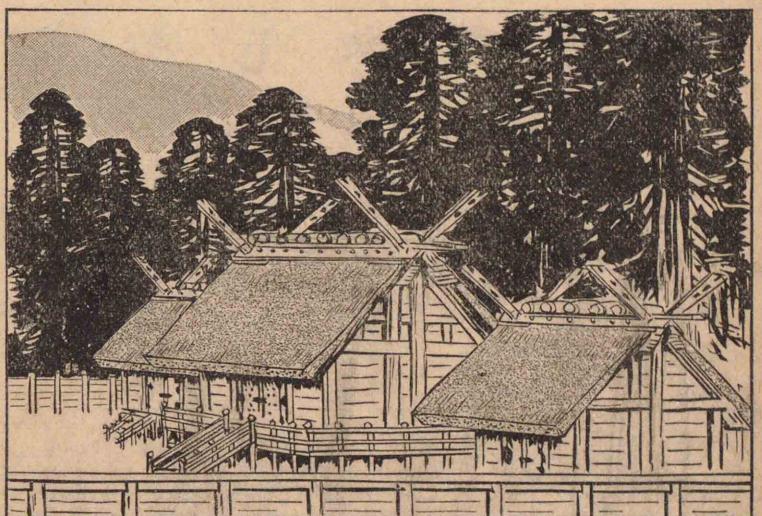
やうやしく拜

禮してから、神

殿の御もやう



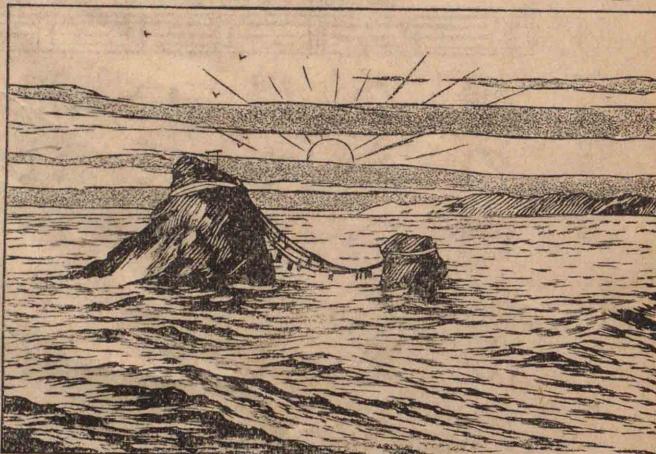
棟



白木造で、お屋根はかやでふ
いてある。棟にはかつを木が
ならべてあり、
棟の兩はしには千木が置いてある。何のかざり

もない御神殿を
拜して、まことに
おそれ多い氣が
した。

參拜をすまして
から、二見浦を見
に行つて、おみやげに貝細工を買
つた。こはさないやうにして持つ



細貝

て歸る。

夕方京都へ立つ。

三月十九日

父から

千太どの

をはり

國六

昭和四年四月廿四日翻刻印刷

尋常小學國語讀本卷六一

昭和四年五月廿七日翻刻發行

定價金九錢い

著作権所有

發著作者

文部省

翻刻發行

東京書籍株式會社

兼印刷者 代表者 石川正作

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

昭和四年四月廿四日
文部省検査局

印刷所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

東京書籍株式會社工場

發行所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

東京書籍株式會社

須磨

広島大学図書

2500032329



文庫

29
329